

氏名	宮 本 隆 二
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博乙第 号
学位授与の日付	平成16年9月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	先天性股関節脱臼放置例に対する大腿骨転子下外反骨切り術 の長期成績
論文審査委員	教授 大塚 愛二 教授 金澤 右 助教授 堤 明純

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学童期以降まで放置された先天性股関節脱臼(先股脱)に対し、Schanz法に代表される転子下外反骨切り術を施行し、平均33年の長期成績について調査した。年長児先天股脱における本法の有用性について検討した。

対象は学童期以降に先股脱放置例に対し転子下外反骨切り術を施行した24例24関節である。手紙によるアンケート調査および直接検診を行った。アンケート調査18例では日本整形外科学会判定基準(JOA score)の股関節可動域を除く80点評価(可動域測定しえないので)では平均51.4点(23?70点)であった。検診が可能であった14名のJOA scoreの総得点は平均60.7点(41?90点)であった。

今回の調査により、本法の年長児先天股脱における治療法では股関節痛の発現時期が遅く、またその程度も軽度で、ADLの制限は少なかった。このことから学童期以降まで放置された先天股脱の治療法として現在でも有効といえる。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、学童期以降まで放置された先天性股関節脱臼に対し、転子下外反骨切り術を施行した例の術後長期間の成績(平均33年)について、調査(アンケートと直接検診)を行ったものである。得られた関節の疼痛の出現時期と程度や日常生活動作に基づく得点、ならびに直接検診例の関節可動域に基づく得点を評価した結果、転子下外反骨切り術が学童期以降まで放置された先天性股関節脱臼に対し有効であるという結論を得ている。このことは本疾患の同様の症例に対する治療方法を選択する際の有用な情報となり、価値ある業績である。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。